

片山
湯之上
寺島
樵一
早苗
享編

九代抄

〔注〕

内閣文庫本

古典文庫

片山
湯之上
寺島樵
早享
一苗編

九代抄

〔注〕

内閣文庫本

古典文庫

古典文庫第四四〇冊

昭和五十八年五月二十五日印刷発行

非売品

編者 片山享
湯之上早苗

寺島樵一

発行者 吉田幸一

抄代九
(内閣文庫本)

印刷者 共立印刷株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 (九一〇) 二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

凡例	三
----	---

『九代抄』解説	五
---------	---

九代抄〔注〕内閣文庫本	五
-------------	---

住吉大社本『九代抄』注文校異	二五
----------------	----

凡 例

一、本書は『九代集抄』の歌番号に拠り、内閣文庫本『九代抄』の注文のみを翻刻したものである。

二、翻刻に際しては次の方針に拠った。

1 漢字・仮名の別や仮名遣い等はすべて底本のままとしたが、漢字の字体はおおむね通行字体に改めた。

2 底本にある歌頭の異本校異は、本文末尾に（頭書）と注して記し、他の書入れは底本のままとした。

3 後藤重郎氏蔵本『九代抄』で校合し、底本の誤脱を補う場合のみ、底本の当該個所に黒点を施し、括弧内に校異を記した。従って黒点がなくて括弧内に記入があるものは、校合本のみにある本文である。

4 歌番号を『九代集抄』に拠ったため、歌順排列の異なる場合は、番号が順序になっていないことがある。なお、和歌のみで注が記されていない場

合は欠番になっている。

三、巻末に住吉大社本『九代抄』注文校異を掲げた。たゞし、底本の『九代集抄』による校異は住吉大社本にはないので、本校異では示さず、また送り仮名、仮名遣いの異同、濁点の有無等は省略した。

四、本書の分担は、春部より秋部・新古今集までを湯之上、秋部・新勅撰集より恋部までを片山、雑部を寺島が翻刻し、解説を片山が担当した。

五、翻刻を許可された内閣文庫ならびに校合をお許しくださった後藤重郎氏に深謝申しあげる。

昭和五十七年十月廿三日

片山 享

湯之上 早苗

寺島 樵一

『九代抄』解説

一

『九代抄』有注本は伝本少く、囑目し得たのは内閣文庫本・後藤重郎氏蔵本の二本のみである。

1 内閣文庫本（和二〇〇一—一〇〇）

袋綴二冊。薄青表紙。縦27・4センチ、横18・6センチ。題簽は左肩にあるが、両冊とも破損・虫損がはなはだしく「□代抄」とのみ見える。内題は「九代抄上」「九代抄下」とある。一面十一行、一首一行書。墨付上冊一〇二枚、下冊一一〇枚。下冊奥に、

秘歌

うらやまし伏猪の床はやすくとも歎くもかたみねぬも契りを

浪のよる浦半の月をふもとにてまつ袖しほるみねの松風

老の友月のみやこのあけかたにこゝろある人のこゝろをそしる

かすみつゝ花ちる山の朝ほらけ後にや風のうさもしられん

春の花秋の月にも残りけりこゝろのはては雪の夕くれ

の五首がある。「うらやまし」の歌は『拾遺愚草』八八九・六百番歌合の寄獣恋、

うらやますふするの床はやすくともなけくもかたみねぬも契りを

の定家歌。「かすみつゝ」は『続古今集』春下・二四の宜秋門院丹後の歌。「春

の花」は『秋篠月清集』三〇・十題百首・天象十首中の

春の花秋の月にもこのりける心のはてはゆきのゆふくれ

の良経の歌で、他二首は不明である。右秘歌五首の次に、

右一冊、従後撰集至統後撰集拾遮眼銘肝之作、書者一千五百首号九代抄

也、送春鐘尽秋漏而閑窓勒之、専為老懶之難勘博覽又思童蒙之不深求耳

弄花軒肖柏牡丹花 在判

享保十九寅年冬

藤原盛武写之

とある。識語の「勘」は「堪」の誤り、また「不深求耳」は「不及深求耳」の一字が欠脱している。本書は、本文に勅撰集名を記し、次に部立名を記す。作者の記入はなく、歌題注記の類は一切ない。『九代集抄』と較べて、歌の異同を検すると、恋部八三〇・雑部二七の二首を欠脱し、歌順異同は春部新古今歌二四の次に新勅撰歌三・二三の二首が入り、夏部三〇と三一、秋部四三と四六、恋部七七と七八、九三と九四の歌順がそれ〴〵逆で、雑部二三七―二四〇の四首が二三〇の次に位置する。さらに、恋部八六は、

なき名そと人にはいひてありぬへし心のとほゝいかゝこたへむ

歎あまりうき身そ今はなつかしき君ゆへ物を思ふとおもへは

なけき余りて今には君故に物を思ふわか身とおもへはなつかしきと也とある。「なき名ぞと」の歌は後撰集七六よみ人しらずの歌で、既に七二に出て

おり重出歌であつて、八六の歌は注文の個所にある「歎あまり」がそれである。こうして本書は『九代集抄』とは別本である。奥書署名や恋部新古今巻頭歌八三〇を欠くことなどに着目すれば、本書の拠つた『九代抄』は第三類本系であつたと思われるが、転写を経たものか本文は総じてよくない。もつとも現行本『九代集抄』の歌本文もよいものではなく、例えば恋部九三

夕されは君_きますやと待しよの名残そ今もいねかてにする（新勅撰八六三）

は『九代抄』一・二・三類本、『九代抄』注本ともに第二句は「君_きまさんと」であり、第四句は『九代抄』第一類本は「名残も今そ」第二類本は「名残そいまに」第三類本「名残そいまも」『九代抄』注本は「名残そ今は」とあり、第三類本が正しく、『九代集抄』はそれを受けている。雑部二〇三は、

月影は旅の空迄かはらねとなを都のみ恋しまは（松平本や）なそ（後拾遺

五三）

とあるが、『九代抄』第一類本は欠歌、他諸本および『九代抄』注本は第二句が「旅の空とて」でそれが正しく、『九代集抄』の誤りである。また、二二

西へ行心はかりはあるものをひとりないりそ山のはの月（金葉六六）

は第二句が『九代抄』諸本、『九代抄』注本は「心はわれも」であって『九代集抄』の誤りといったごとく、誤字が多いものである。『九代抄』注本は『九代集抄』に較べてさらによくない。例えば、秋部三二

夕暮は玉ちる野へのをみなへしまくらさためぬ秋風そ吹（新古今三六）↓
（夕されは）

秋部四〇

身のうへをおもひつゝくる夕暮の荻の上葉に風わたるなり（新古今三五）↓
（身のほとを）

秋部三三

秋の風ふきにけらしな外山なる柴の下草色かはるまで（新勅撰三三）↓（秋の嵐）

雑部九六

世の中をかくくいいひてはてくはいかにやくならんとすらん（拾遺吾

セ ↓ (第二句かくいひくゝの、第四句いかにやいかに)

雑部二四

月見はと契りて出し、故郷の人もやこよひ袖ぬらすらん (新古今二六) ↓ (契りをきてし)

雑部二三

今はわれ松のはしらに竹のかき住へき物を苔ふかき袖 (新古今二五) ↓ (松の柱の杉の庵にとつへき物を)

などのごとく、かなりの誤りがある。もっとも二四は『八代集抄』などは「ちきりて出し」とあるが、いずれにしても『九代抄』本文からは逸脱していつているわけである。

2 後藤重郎氏蔵本

袋綴二冊。表紙は句を記した懷紙を折目をのばして洩を引いたもの。縦27・1センチ、横19・5センチ。左肩に「九代抄 上」「―― 下」とうち付書にする。一面十二行、一首一行書。江戸中期写。渡辺千秋蔵書の朱印あり。墨付

上冊九四枚、下冊一〇三枚。下冊奥に、秘歌五首を記し、次に、

右一冊、從^ニ後撰集^ニ至^{スル}續後撰集^ニ拾^ハ遮^{キリ}眼^ニ銘^{スル}肝^ニ之作^ヲ、書^{スル}者一千五百
首号^{スル}九代抄^ト也、送春鐘尽秋漏而閑窓勒之、專為老懶難^ニ勘博覽^ト又思童蒙之
不^レ深求耳^{（云々）}

文龜第三曆孟冬上旬

弄花軒肖柏牡丹花 在判

とあり、一部に訓点送り仮名を付すが、内閣文庫本と同一の識語を有する。本文は勅撰集名、部立名を記し、歌本文に入る。作者名、歌題注記の類は一切ない。本文和歌の欠脱、歌順配列の異同等内閣文庫本に同じ。ただし内閣文庫本では四三の歌および注文が四五の次にあり、「此哥古郷はちるの前ニ有」と注するが、本書は正しい位置にある。『九代抄』注本は『九代集抄』による校異を記すが、内閣文庫本は上冊に上欄外や行間に「イ本」「イニ」として校異を記し、本書は「他本注文」として上欄外に記す。下冊は両本ともに「異註」として本文化している。校異には若干の出入りがあり、本書には内閣文庫本にみ

られない次の校異がある。

上冊、第一丁「九代抄上」の内題の下に、

他本注文

九代抄□□自後撰集至続後撰集抄出之心也。後撰とは古今に残りたるを拾ふ故也。後撰拾遺にて古今の秘事多分しらるゝ事有と也。

また、本書三七「他本注文 月見れば千々に物こそ……」の校異は三六に、
「他本注文 入佐山名所也」は内閣文庫本では六三の歌頭にあるが、いずれも本書の位置が正しい。内閣文庫本にあって、本書にない校異は次の二ヶ所である。

三六 さありたるけしきもなく月すむと也。

四四 さえてはさやか也。十市は擣衣道地、名所也。

なお、本書は春部二四、

浅みとり野辺の霞はつゝめともこほれて匂ふ花桜哉

花桜を野への霞は包こめたれとも匂ひはこほれくるとなり。こほるゝとはほるゝ也。是より以下此次四首散ちらすの哥注混す、可削は霞の内を。あひたきと也。あはなんはあへと下知したる也。此哥ちり

たらは行ましきなとわろし。

として、注文の乱れを正しているが、「こぼるゝ也」の加文が何に拠ったかは明らかでない。

また、恋部七〇の歌頭に、

(楽カ)

梁天贈内詩云／莫对月明思往事／損君顔色減君年

の注記。恋部九三の歌頭に、

拾遺

いかにしてしはし忘れん命たにあらはあふ世のありもこそせめ

の本歌の指摘。雑部九三の歌頭に、

今も俗猪の牙をゐのきといふ。

の注記がある。

また、恋部八六の歌頭に、

後撰集既出之詠哥與注文齟齬、疑伝写之誤乎。

の注記がある。おそらく「注文齟齬」とは校合本である『九代集抄』と本書と

の注文の相違を指摘したもので後人の感想を記したものであろう。

かくて、本書は内閣文庫本と同一系統本であるが、細部については相補う関係にある。

二

『九代抄』注本と『九代集抄』との注文を比べると密接な関係があるが、上巻と下巻では差異があり、上巻の両本の関係はより直接的であるのに対して、下巻は間接的である。

まず、上巻について両者の注文を比較すると、

(イ) 注文が同一であるもの

春部二〇、夏部四、秋部三、冬部三の禿首注が同文である。

(ロ) 『九代集抄』の注に加注のあるもの

例えば、春部二八

しばのとをさすや日影の名残なく春くれかゝる山のはの雲